

■阿倍野Religion-Cafeの再開

The Reopening of the Abeno Religion-Cafe

阿倍野Religion-Cafeは、阿倍野区にある近代長屋を拠点に2009年8月から始まったイベントで、計22回実施してきた。ここでは多方面で活躍する宗教者をスピーカーとして迎えることで、現代の都市社会で見えづらくなっている人々と宗教のつながりを可視化させてきた。G-COEの終了とともに、昨年2月にReligion-Cafeは第1クールを終えたが、これまでの参加者・発表者から第2クールの始動を求める声が多数聞かれるようになった。そこで2012年11月27日(火)、実行委員会を結成し、その主催、都市研究プラザ後援により、Religion-Cafeを再開した。これまでは「まちづくり」「社会福祉」に関連する発題が中心だったが、今後は宗教がもつ「ケア」や「救済」にフォーカスをあてた発題を企画していく予定である。

■白波瀬 達也 (URP特別研究員(若手))



第22回の阿倍野Religion-Cafeの様子

The first stage of the Abeno Religion-Cafe came to an end in February last year and since then has not been meeting, but many of those who participated or made presentations up till now have raised their voices in an appeal to start it up again. In response to that, the Abeno Religion-Cafe launched a second stage beginning in November last year under a new format.

■イベント・研究会の予定

各詳細は、都市研究プラザホームページをご覧ください。

2/2 ～3	第3回 ラウンドテーブル会議～市民ワークショップ …国際交流センター	
2/4	第7回 アジア・アーツマネジメント会議 …大阪市立大学高原記念館	第2ユニット
2/16	国際(小)円座「大阪の都市社会史と史料テキストをめぐって」 …大阪市立大学高原記念館	第1ユニット
2/18	第11回 ジョグジャカルタ都市研究フォーラム …インドネシア・ガジャマダ大学	第2ユニット
2/20 ～22	第3回 東アジアインクルーシブネットワークの構築に向けたワークショップ …西成プラザ他	第3ユニット
3/4 ～5	第11回 バンコク都市研究フォーラム …チュラロンコン大学	第2ユニット
3/22	第4回 A & Aフォーラム …大阪市立大学高原記念館	第2ユニット

■URP特別研究員(若手)公募

募集要項(平成25年2月募集分)

情報⇒<http://www.ur-plaza.osaka-cu.ac.jp/about/recruit.html>

■URP・Information

■東アジアインクルーシブシティネットワークの構築に向けたワークショップの開催

2013年2月20(木)～22日(土)の3日間、西成プラザにて第3回東アジア・インクルーシブシティネットワークの構築に向けたワークショップを都市研究プラザが主催する。参加者はソウル、台北、香港のサブセンターより、研究者に加えて行政関係者、NGOの職員など多彩な顔ぶれとなる。「脆弱都市から包摂都市へ」をテーマに、社会的弱者、ハウジング、社会的不利地域に関する東アジア各地域の現状に加え、その施策や実践経験を共有し、包摂都市を目指した議論を行う予定である。

■ジョグジャカルタ・バンコク研究フォーラムの開催

2013年2月18日(月)、ジョグジャカルタにおいて、ガジャマダ大学、インドネシア芸術大学と共催で、“Social Accessibility through Culture”をテーマに、第11回の都市研究フォーラムを開催する。続いて、3月4日(月)～5日(火)には、バンコクで、チュラロンコン大学との共催により、“Arts Accessibility and Advocacy”をテーマに、第11回都市文化研究フォーラムを開催する。

いずれも、アートを軸とした都市再生のための諸方策について、関係する専門的研究者たちと議論を深める予定である。

コラム:釜ヶ崎芸術大学

「学びたい人が集まれば、そこが大学になる」と考え、大学で学ぶという選択肢がなかった労働者が多い釜ヶ崎地区で、2012年11月19日、都市研究プラザ他の協力のもと「釜ヶ崎芸術大学」がオープンした(主催:NPO法人こえとことばとこころの部屋(ココルーム))。書家や詩人、宗教学・天文学の研究者等が講師となる公開講座で、誰でも無料で参加できる。2013年2月までに計42講座が開かれる。

みんなでつどい、学び合う場となる「芸術大学」のユニークな取り組みは、全国紙にも掲載される等、注目を集めている。

URP

Osaka City University | Urban Research Plaza
大阪市立大学 | 都市研究プラザ

「都市研究プラザ」は、都市再生へのチャレンジとして大阪市立大学が2006年4月に設立した全く新しいタイプの研究施設です。「プラザ」という名前が示すように、都市をテーマとする人々が出会い、集まる広場をめざしています。2007-11年度グローバルCOE拠点「文化創造と社会的包摂に向けた都市の再構築」の実績をさらに発展させ、現場や海外での研究・まちづくり活動、さらに、世界第一線級の研究者や政策家と国際的なネットワークを構築しています。

<http://www.ur-plaza.osaka-cu.ac.jp/>

558-8585 大阪市住吉区杉本3-3-138 tel.06-6605-2071

e-mail:office@ur-plaza.osaka-cu.ac.jp

所長 佐々木雅幸 副所長 水内俊雄 岡野浩 富田常雄

ユニット長 1U 佐々木雅幸 2U 嘉名光市 3U 水内俊雄 4U 岡野浩

大阪市立大学都市研究プラザ ニュースレター 第18号

編集委員会 佐藤由美 野村侑香

<http://www.ur-plaza.osaka-cu.ac.jp/staff/>

URP
Osaka City University

Newsletter Issue 18,
Feb. 2013

大阪市立大学都市研究プラザ ニュースレター 第18号 2013年2月

第3回 国際ラウンドテーブル会議「都市の世紀を拓く」 居住貧困を断ち切る：居住福祉政策と居住支援型社会的企業の実践

The 3rd International Roundtable Meeting “Towards the Century of Cities”
“Breaking with Housing Poverty: Housing Welfare Policies and Practices of Social Enterprises that Offer Housing Support”

第3回を迎えた国際ラウンドテーブル会議「都市の世紀を拓く」として、国際シンポジウム、及びエクスカージョンを2012年11月30日～12月1日に、市民ワークショップを2013年2月2日にそれぞれ開催した(共催:都市研究プラザ・公益財団法人大阪国際交流センター)。

■国際シンポジウム

まず、2012年12月1日(土)、国際シンポジウム「居住貧困を断ち切る：居住福祉政策と居住支援型社会的企業の実践」が大阪市立大学高原記念館学友ホールで開催され、約70名の市民、活動団体、研究者らが参加した。

近年、日韓両国では住まいの貧困への対処が課題となっている。本会議は、弱者への居住福祉の向上を主たる活動とする日韓の先進的な取り組みを紹介し、経験共有の場を設けると共に、居住貧困を断ち切るための居住福祉政策と実践のあり方を議論する場となった。

シンポジストの報告に先立ち、佐々木雅幸(都市研究プラザ所長)、共催団体の橋本寛樹氏(大阪国際交流センター常務理事)、後援団体の早川和男氏(日本居住福祉学会会長)より開催の挨拶をいただいた。

第1部では、「日韓における居住の現状と居住福祉政策の課題」をテーマに、2つの報告が行われた。

まず、韓国からのゲストである金秀顯氏(世宗大学副教授)からは「経済低成長期の居住福祉政策」というタイトルで、近年、韓国では、様々な居住貧困の課題や脆弱な居住セーフティネットに対し、居住福祉へ向けた包括的な取り組みがなされていることが報告された。一方、低廉住宅の縮減や庶民層の居住



金秀顯氏の報告

費負担が増えている問題については、先進国並みの公共賃貸住宅の供給を実現していくことが与野党を問わず合意されていることが紹介され、政府が公共住宅の供給から撤退している日本との違いが浮き彫りとなった。

しかし、経済が低成長期に入った昨今の韓国では、こうした供給増加にも限界が見られ、民間住宅ストックを活かした官民共同の居住福祉デリバリーシステムがさらに必要となっている点が指摘された。

プログラム

【開催のあいさつ】

1. 佐々木雅幸 (ラウンドテーブル会議組織委員長、都市研究プラザ所長)
2. 橋本寛樹氏 (公益財団法人大阪国際交流センター常務理事)
3. 早川和男氏 (神戸大学名誉教授・日本居住福祉学会会長)

【セッションⅠ：日韓における居住の現状と居住福祉政策の課題】

司会: 水内俊雄 (都市研究プラザ副所長)

1. 金秀顯(キム スヒョン)氏 (世宗大学副教授(元韓国政府大統領秘書官(社会政策担当)、元韓国政府環境省副大臣)

2. 平山洋介氏 (神戸大学教授)

【セッションⅡ：日韓における居住福祉実践と社会的企業】

1. 文永録(ムン ヨンロク)氏 (社団法人居住福祉協会事務局長:住宅改修を中心とした社会的企業の全国展開)

2. 佐藤由美 (都市研究プラザ特任講師:サービス付き高齢者住宅から見る日本の居住支援型社会的企業の展望)

【セッションⅢ：日本における住宅と福祉の複合的な実践】

1. 池田幹雄氏 (新宿区福祉部:東京都における福祉政策と居住政策の複合的な実践-東京都地域生活移行支援事業を中心に)

2. 小林真氏 (NPO大東ネットワーク事業団代表:民間非営利団体による住宅困窮層への複合的な居住支援)

3. 水内俊雄 (都市研究プラザ副所長:大阪市西成区における生活保護住宅扶助による住宅市場の現状とその課題)

【質疑応答・討論】

コーディネーター: 全泓奎 (都市研究プラザ准教授)

共催: 大阪市立大学都市研究プラザ・公益財団法人大阪国際交流センター

後援: 日本居住福祉学会・NPO法人ホームレス支援全国ネットワーク・一般社団法人インクルーシブシティネット

これに続き、日本側の発表者である平山洋介氏（神戸大学教授）は、日本の住宅政策の再構築の必要性について論じ、現在の日本における住宅問題は、住宅のあり方そのものを問うものであり、日本政府が住宅政策を軽視してきた結果である点を指摘した。

特に、低家賃住宅のストックが減り、今までの住宅政策に重要な位置を占めてきた企業・家族福祉が崩壊しつつある中で、不安定な労働条件におかれている単身者の居住問題が社会問題化する恐れがあることを指摘し、家族・企業・市場に依存するのではなく、住宅政策へ積極的に投資していくことが必要であると述べた。



平山洋介氏の報告

第Ⅱ部は、「日韓における居住福祉実践と社会的企業」というテーマで、日韓両国の実践に関する報告が行なわれた。

最初に、文永録氏（韓国居住福祉協会事務局長）が韓国での老朽住宅を対象とした住宅修繕事業について報告した。当協会は低所得層の居住安定と雇用創出を目的として活動を展開している。



文永録氏の報告

主に生活保護受給者への現物給付として住宅修繕事業を行い、低所得層の居住福祉の向上を図っている団体である。また、当団体が、低所得層の雇用創出のため、年間約1,600人に上る低所得層に仕事を提供してきた実績が報告された。しかし、ほとんどの事業が小規模に留まっており、今後はさらなる事業の拡大が課題である点が指摘された。

韓国の実践報告に続き、佐藤由美（都市研究プラザ特任講師）が「サービス付き高齢者住宅から見る日本の居住支援型社会的企業の展望」について報告した。介護保険制度の定着を背景に、高齢社会における安定した居住の場の確保に向けた事業の需要を見込んで営利・非営利企業が参入し、産業として拡大している日本の現状が紹介された。また、福祉・住宅政策の連携体制が不十分なため、居住福祉としての統合された政策領域が未発達であることを指摘し、その上で、生活支援サービスの提供の考え方の違いにより多様化するサービス付きの高齢者向け住宅の事例紹介があった。今後、住宅・福祉の相互乗り入れや一体化、当事者の主体性の尊重、地域資源ともなりうる住宅づくり等が居住支援型社会的企業（一般

企業、社会的企業、営利企業、非営利組織）の課題であると述べた。

第Ⅲ部は、「日本における住宅と福祉の複合的な実践」をテーマに、池田幹雄氏（新宿区福祉部）より、「東京都における福祉政策と居住政策の複合的な実践-東京都地域生活移行支援事業を中心に」というタイトルで、2006年～2010年に東京都の独自事業として実施したホームレス地域生活移行支援事業について報告があった。この事業の最も大きな特徴は、「ハウジングファースト」といわれるように、施設での生活を前提とせず、路上からすぐ畳の上で上がるよう支援するという点にある。さらに就労及び生活支援を同時に行う複合的な居住支援がなされていた点も看過できない。また、本事業の中で、様々な民間団体と連携したことによって安定的な地域生活移行が可能となり、その後の居住生活の持続性が確保できた点も、本事業の評価すべき点であると述べた。そして、今後は、不安定な居住・雇用関係の下で生活する若年層への対応が課題となることが指摘された。



池田幹雄氏の報告

つづいて、小林真氏（大東ネットワーク事業團理事長）が、大東ネットワーク事業團による第二種社会福祉施設の無料低額宿泊所の事業内容について報告した。

当事業の特徴は多様な団体と連携しながら、様々な利用者（刑余者、生活困窮者、年金生活者、身体障害者）へ住宅または福祉支援を提供している点にある。

最後に、水内俊雄（都市研究プラザ副所長／教授）が、大阪市西成区北西部における近年の民間住宅市場の変容について報告した。当地域では、居住支援のための公的な制度・事業がなくても居住貧困者が入居できる仕組みになっている点が特徴的である。リノベーション、コンバージョン、リファイニングという既存のローカルな住宅ストックの活用が、居住貧困者への居住福祉資源になるだけでなく、まちづくりや密集市街地の改造、地域の再生にもつながる可能性が指摘された。



小林真氏の報告

最後に全泓奎（都市研究プラザ准教授）がコーディネーターとなり質疑・討論を行なった。時間上の制限により韓国側への質疑を中心に進められたが、韓国側の報告者から日本側報告者への質疑もあり、活発な議論が交わされた。

その中で、韓国では与野党を問わず公共住宅の供給が社会政策の柱となっており、官民パートナーシップによる整備が進められていること、日本では居住困窮層の更なる拡大が予想される中、官から民への居住福祉の主体及び質の変化が生じていることが報告された。しかし、新たな住宅ニーズへの対応に関しては韓国側もまだ多くの課題を抱えており、それには日本の取り組みが参考となる点、また日本側からは、韓国の先進的な制度や経験、公共の役割が、今後の居住福祉政策の展開において参考となる点が確認された。

今後は、今回のような経験交流の場に各々の政策担当者も交えて議論できる機会を増やし、相互理解や交流をさらに深めていくことが期待される。

■コルナトウスキ・ヒュラルド（都市研究プラザ研究補助スタッフ）



質疑・討論をコーディネートする全准教授



参加者間での熱心な質疑応答・討論の様子



会場となった学友ホール

On December 1, 2012, The URP and the Osaka International House Foundation, with the support of the Housing Welfare Association, the National Homeless Support Network (NPO) and the Inclusive Cities Network, co-hosted the 3rd International Roundtable Meeting on "Towards the Century of Cities", this time focusing on housing poverty, housing policy discrepancies and the actual support practices of social enterprises in Japan and South Korea.

Session 1 focused on the current housing conditions in Japan and Korea, and their issues concerning housing welfare policy. Assoc. prof. Soo-hyun Kim reported on current status of housing poverty in South Korea and how its housing policy is striving to upgrade its social housing program to similar standards of Western developed countries. Special attention should be paid on how to tackle the decreasing affordable housing market. In the Japanese case, Prof. Yosuke Hirayama stressed the necessity of a higher priority to housing policy on the government's policy agenda. His analysis made it clear that Japan's original policy around corporate and family-based welfare is reaching its limit in concern to the increasingly unstable labor market and single households.

Session 2 held two presentations on housing welfare practices by social enterprises in both countries. Mr. Young Rock Moon elaborated on his company's renovation activities for decrepit low-rent housing. Adjunct lecturer Yumi Sato presented on how "serviced housing for elderly" can be a reference to social enterprises that provide housing support in Japan.

In Session 3 Mr. Mikio Ikeda and Mr. Makoto Kobayashi introduced their housing projects for the homeless in Tokyo and Osaka respectively. Prof. Toshio Mizuuchi concluded the session with a presentation on recent transformations in the private housing market in the NW area of Nishinari, Osaka, where private actors are now the forerunners in providing housing support for socially vulnerable groups. Finally, Assoc. prof. Hong -Gyu Jeon coordinated a discussion on the current and future challenges in housing in both countries.

In conclusion, housing (poverty) remains to be a complicated topic in Japan and South Korea. In order to comprehensively cope with this issue, the meeting made it clear that the distance between governmental policy and actual support practices is still quite big and thus more cooperation is required to cater for the current housing needs of various socially vulnerable groups.

■ エクスカーション

国際ラウンドテーブル会議に先立ち、2012年11月30日(金)午後、日本最大の日雇労働者の集住する簡易宿所街、日本最大の被差別部落、在日コリアンの集住等、大阪の都市社会問題が可視化されやすい大阪市西成区を中心にエクスカーションを行った。

当日は、水内俊雄（都市研究プラザ副所長/教授）の案内のもと、社会情勢の変化によって簡易宿所が観光客向けのビジネスホテルや生活支援が付いたサポータティブハウスへと変化してきた状況について実地に把握するとともに、地域にある生活保護施設を見学し、織田氏（社会福祉法人自彊会）から施設の運営形態について説明を受けた。



生活保護施設の見学



変化したまちなみの説明

その後、(株)ナイスへと移動し、同社の竹中・佐々木両氏から、高齢化が著しく、様々な課題が集積する地域において展開する社会的企業の取り組みについて、エピソードを織り交ぜながら語っていただいた。地域のニーズを敏感に捉え、変化してきた同社の取り組みに対するエクスカーション参加者の関心は高く、多くの質問が寄せられた。最後は韓国育ちの台湾人が経営する中華料理屋にて、参加者間の懇親を深めた。

■ 富永哲雄（都市研究プラザ研究補助スタッフ/文学研究科後期博士課程）

In advance of the International Round Table Conference, an excursion was conducted on November 30, 2012 under the guidance of Prof. Toshio Mizuuchi (Vice Director of the Urban Research Plaza) that focused on the Airin area and the Nagahashi district of Osaka City's Nishinari Ward, where many of Osaka's urban problems are concentrated.

■ 西成エスニックミュージアム文化講座 Nishinari Ethnic Museum Cultural Open Lecture

2012年12月15日(土)、西成区内の韓国人会館で、第1回西成エスニックミュージアム文化講座が多文化コミュニティワーク研究会、民団西成支部の共催、都市研究プラザの後援で実施された。

今回は、2009年から韓国ドラマ講座を開き、ドラマに関する執筆活動も行っている山下^{ヨンエ}英愛氏（立命館大学非常勤講師）に「韓国ドラマで学ぶ歴史と文化」というテーマで講演して頂き、参加者は21名であった。

当日は、韓国ドラマの映像を見ながら、ドラマの変遷との中で描かれる女性像の変化について時代背景と絡めて解説して頂いた。

韓国でテレビドラマの放映が開始された1960年代から今日までの歴史を大別すると、1970年代までの独裁政権による言論統制の時代、民主化運動が活発化し民主化宣言が出された1980年代、民主化により消費文化が拡大し価値観が多様化した1990年代から現在までに区分できる。韓国ドラマが面白いのは、社会をリアルに反映しているからであると山下氏が解説するように、80年代に始まったトレンドードラマでは新しい女性像が登場したが、90年代のドラマでは貞淑で耐える女性像が描かれ、2000年代からは女性の社会進出を反映してドラマでも自己主張する女性、リーダーシップを発揮する女性が盛んに描かれるようになっている。

西成エスニックミュージアム構想は、同地域に潜むエスニックな文化資源を掘り起こし、共生による地域再生ビジョンを模索することを目指している。さらに、1月19日(土)に「韓国ドラマで見る多文化共生社会」というテーマで、鶴見橋商店街内の中華料理店「鴻福」にて開催した。

■ 矢野淳士（都市研究プラザ研究補助スタッフ/大阪大学大学院前期博士課程）



文化講座の様子

At the First Nishinari Ethnic Museum Cultural Open Lecture, which was held on December 15, 2012, Ms. Young-ae Yamashita spoke on the theme of "Learning about History and Culture from South Korean TV Dramas" and offered an interpretation of the evolution of South Korean TV dramas and the changes in the images of women that are depicted in them. Ms. Yamashita said that the image of women that is portrayed in Korean dramas reflects South Korean society, it has changed along with the changing times, and that is what makes Korean dramas so interesting.

■ 第6回長屋路地アート The 6th Nagaya Roji Arts Event

豊崎プラザでは主屋や長屋の耐震補強や改修工事をするため、住居利用および芸術や福祉の利活用の試みを行っている。その一環として、2012年11月17日(土)18日(日)、改修した長屋の魅力など大阪長屋の保全・利活用について広く発信するため、「第6回長屋路地アート」を開催した。初日はあいにくの雨だったが、2日間で約150名の来場があった。17日午後をコアイベントとし、主屋や改修された長屋で様々なイベントを実施した。今回は、公開する長屋の入口に学生が制作した「さをり織り」の暖簾を掲出し、秋の路地に彩りを添えることができた。

主屋では、伝統的な住環境で日本文化に触れる機会として、大阪市立大学茶道部「利休会」によるお茶会を行い、40名ほどが来場、主屋の雰囲気やゆくり味わっていた。茶道部の学生は、大阪くらしの今昔館の協力を得て着物でのお手前となり、緊張感と共に練習の成果を発表する場となった。所有者の方も主屋が茶席として演出されるなど新たな試みに喜ばれていた。また、南双長屋では改修前後の写真パネル展、東風長屋ではフラワーアーティストによるお花の生け込みライブや音楽演奏とカフェ、北終長屋では生活科学部3年生によるまちづくり演習課題の展示などを行った。周辺の長屋居住者の方にも協力いただき、無事に2日間イベントを行うことができた。

大阪市内では同日「オープンナガヤ大阪2012」が行われ、昨年の長屋路地アートに参加したことがきっかけで改修に至った長屋を含め、計11ヶ所の長屋が公開された。今、長屋保全への活動に市民の熱い視線が注がれている。

■ 荻千紘（URP特別研究員（若手））



茶道部「利休会」による主屋でのお茶会

At the Toyosaki Plaza, the 6th annual Nagaya Roji Arts event was held on November 17 and 18, 2012. At this year's event there were among other things a tea ceremony performed by the university tea ceremony club "Rikyu-kai;" an exhibition of photographic panels showing the appearance of the nagaya before and after renovation; a live demonstration of flower arranging by a flower artist, together with a musical performance and cafe; and an exhibition of seminar topics on community building put on by 3rd-year students in the Faculty of Human Life Science. These were all held utilizing the main building and the renovated nagaya buildings.

■ 国際円座「都市における貧困と救済」 Poverty & Relief in the City

今回の国際円座「都市における貧困と救済」は、都市研究プラザ都市論ユニットと近世大坂研究会・都市文化研究センターの共催で開催された。日本列島社会の近世は、大都市の展開によって特質づけられるが、それは一方で都市に多様な周縁的な社会集団を展開させることをも意味した。近世大坂研究会では、それらの社会集団を〈法と社会〉という視点から解明する共同研究を進めてきた。今回は「貧困」の諸相とそれに応じた「救済」を窓口として、都市社会構造に迫ろうとしたのである。

初日は、まず塚田孝（文学研究科教授）が総括的な問題提起をおこない、「貧困と救済」をテーマに、〈法と社会〉の視点から〈身分的周縁〉をリアルに把握し、近世身分社会の〈比較類型史〉へとつなげていく方向性を提示した。つづいてマリア・ムッザレリ氏（ボローニャ大学教授）が、中世末のイタリア諸都市の事例から、自発的貧困（キリスト者）と強いられた貧困（真の貧者から危険な貧者まで）を指摘し、近代に向けて後者が拡大していくことや救済機構としての公益質屋などについて論じた。また高澤紀恵氏（国際基督教大学教授）が、近世パリにおける「貧者」の識別・区分のあり様を紹介した。

二日目は、〈近世〉と〈近代〉の二つのセッションに分けて報告・討論を行った。〈近世〉セッションでは、都市大坂の店住友家の行う救済、都市近郊農村における村落構造と飢饉時の救済、近世・近代移行期の非人組織の解体過程における貧困と救済に関する三本の報告があった。〈近代〉セッションでは、ハンセン病をめぐる医療環境、北伐革命に伴う上海日本人居留民の被害に対する救済、大阪における警察社会事業から方面委員制度への展開の意義に関する三本の報告があった。これを受けて、最後に総括的な討論を行った。

二日間の充実した報告・討論を通じて、貧困や救済を単純な表象イメージで捉えるのではなく、具体的な都市の地域社会のあり方と時代背景に即した把握を進めてこそ、歴史社会の実像に迫りうるということが自覚化された、意義ある円座であった。

■ 山下聡一（URP特別研究員（若手））

On December 1 and 2, 2012, we held a two-day international roundtable entitled "Poverty and Relief in the City." Rather than addressing poverty and relief in a phenomenological and superficial manner, presenters attempted to elucidate the material history of poverty by focusing on the structure of the various social contexts that surrounded it. In addition, they attempted to clarify the diverse forms of relief that resulted from those contexts. Lastly, the roundtable aimed to illuminate the comparative history of poverty by focusing on examples from Osaka, rural villages, and cities in East Asia.

■船場博覧会2012・まちのcommons SEMBA EXPO 2012・Urban Commons

2012年11月19日(月)から23日(金)までの5日間、北船場の地域活性化を目的としたイベント「船場博覧会2012」が開催された。これは2010年まで船場アートカフェが共催していた「まちのcommons」を発展継承したもので、2011年からは、北船場のまちづくりに取り組む3つの組織が協働して開催する「船場博覧会」となった。「まちのcommons実行委員会」と、大阪市が推進するHOPEゾーン事業によって組織された「船場地区HOPEゾーン協議会」、そして堺筋の沿道企業で構成される「堺筋アミニティソサエティ」である。それぞれのこれまでの取り組みを共同で開催することで、イベントの相乗効果を得ることや、何より組織間のコミュニケーションを密にすることで、持続可能なまちづくり基盤の形成を狙った。

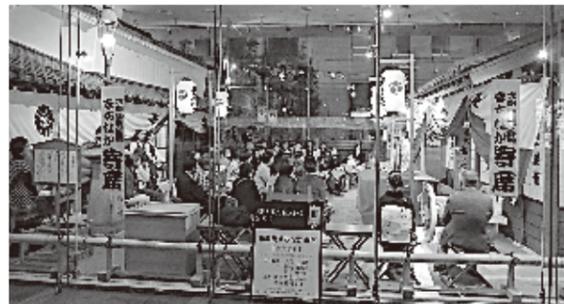
■地域資源を活用した様々なプログラム

3つの組織が集まることでイベントの内容が増え、バリエーションもより豊かになった。全部で30を超えるプログラムが催されたが、その内容はいずれも北船場の歴史や文化を体現する地域資源を活用したものだ。大阪を代表する歴史都市である北船場には、今も多くの近代建築や老舗と呼ばれる歴史ある店舗が多く残る。イベントではそれらの空間を会場にして、トークイベントや体験教室、無料コンサートなどが行われた。なかには非公開の重要文化財も含まれ、定員を大きく上回る申込があった。

北船場の近代建築を巡るまちあるきに、有名レストランの食事をセットしたグルメツアーも人気が高く、北船場における着地型観光の潜在力の高さも確認できた。



旧小西家住宅(重要文化財)での煎茶の会



昆布の老舗・神宗の店舗での寄席

■成果と評価

3つの組織が協働することで、広報も相乗効果が発揮されて地域の企業にも情報が行き渡り、イベント全体で延べ2000名近くの参加者があった。北船場の地域イベントとしてしっかりと定着し、参加者の中にはリピーターも多い。アンケート結果をみても満足度は非常に高く、今後も継続してほしいとの声が多く聞かれた。

■高岡 伸一(都市研究プラザ特任講師)

Three different organizations involved in community-building in Kita Senba cooperated in holding the Senba Exposition 2012 over a period of 5 days from November 19 to 23, 2012. Using early modern buildings and storefronts that remain in Osaka's historic city of Kita Senba as exposition venues, a wide-ranging and diverse program of more than 30 separate events was held, and the historical and cultural attractions of the neighborhood were widely transmitted to the general public. There were as many as 2000 participants.

■タイのお琴チャケーを学ぼう！

Learn to Play the Thai Zither Chakhe!

2012年12月11日(火)、船場アートカフェを会場に、タイの民族音楽の合奏団スリヤサンキートが企画したワークショップを都市研究プラザ主催で実施した。

来阪中のタイ・チュラロンコーン大学芸術学部准教授カムコム・ポーンプラシット氏と、同大学専任講師ポーンプラピット・ポアサワディ氏が講師を務め、まずタイの民族楽器チャケーと、日本の琴の間の類似点と相違点について講義した後、二人によるチャケーの実演が披露された。また参加者もチャケーに触れ、基本的な演奏方法についてワークショップを行った。告知期間が短いこともあって参加者は9名と少なかったが、普段体験する機会のないアジアの民族音楽に触れる貴重な機会となった。

■高岡 伸一(都市研究プラザ特任講師)

On Tuesday, December 11, 2012 at the Senba Art Cafe a workshop was held. That was organized by the Thai folk music ensemble "suriyasangkhit" where there was a lecture on and performance demonstration of the *chakhe*, a Thai folk music instrument resembling a 'Koto'.



チャケーを演奏するポーンプラピット氏(左)とカムコム氏(右)

■創造都市ネットワーク日本(CCNJ)

設立総会・記念シンポジウム

Founding Plenary Meeting and Commemorative Symposium of the Creative City Network of Japan (CCNJ)

2013年1月13日(日)、ヨコハマ創造都市センターで「創造都市ネットワーク日本」の設立総会と記念シンポジウムが開催された(主催:CCNJ発起団体・文化庁・NPO法人都市文化創造機構、協力:都市研究プラザ)。CCNJは2008年2月に大阪で都市研究プラザが主催した「創造都市ラウンドテーブル」を契機に全国規模で築いてきたつながりを、文化庁の支援を受けて具現化したものである。

設立総会では、佐々木雅幸(都市研究プラザ所長)が経過説明と議案提案を行い、多様な主体の創造都市の取組を支援するとともに、創造都市間の連携・交流を促進するためのプラットフォームを形成することを目的に掲げた規約が承認された。規約には、具体的事業として「創造都市ネットワーク会議」の開催や人材育成、調査研究などの実施が定められている。また、基本的運営事務を担う幹事として鶴岡市、横浜市、金沢市、神戸市、篠山市が選ばれ、横浜市が代表幹事となった。

シンポジウムでは先行事例である「創造都市ネットワーク・カナダ」を創設したパーク・テラー氏(ブリティッシュ・コロンビア大学「文化計画と発展研究センター」所長、元バンクーバー市職員)が基調講演を行い、最後に「早く行くなら一人で行け、遠くに行くなら一緒に行け」ということわざを紹介して連携の必要性を強調した。

1月13日時点での会員数は22自治体、6団体、12個人で、今後も参加を広く呼びかけていく。なお、CCNJ設立までの経過および規約や活動内容などの詳細はホームページを参照されたい。<http://ccn-j.net/>

■川井田祥子(都市研究プラザ特任講師)



記念シンポジウムでのディスカッションの様子

On Sunday, January 13, 2013, the founding plenary meeting and commemorative symposium of the Creative City Network of Japan were held at the Yokohama Creative City Center, organized by the CCNJ lead organizations, the Agency for Cultural Affairs, and the Creative City Consortium (NPO), with the cooperation of the Urban Research Plaza. The CCNJ will act towards creating a platform for the promotion of collaboration and exchanges between creative cities.

■AUCワークショップ

「AUCの展望とロンドン会議に向けて」

Association for Urban Creativity Workshop on "Prospects for the AUC and the Lead-up to the London Conference"

AUC (Association for Urban Creativity、都市創造性学会)のボードメンバーの1人でもあるロンドン大学キングスカレッジのアンディ・プラット教授を招き、2012年12月14日(金)、大阪市立大学文化交流センターにおいて、AUCワークショップを開催した。

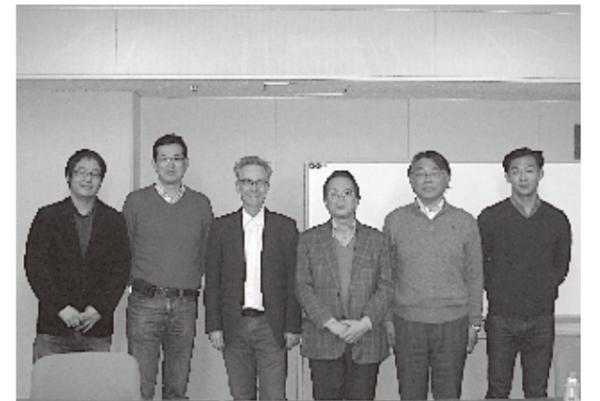
プラット氏は、①Knowledge exchange ②Cultural work ③Governance ④Cultural mappingの4つの領域で研究を行っており、多くの外部資金を取得している。

ワークショップでは、これらの進行中の研究概要の紹介とともに、今後、これらの成果物をもってAUCや学術雑誌CCS (City, Culture and Society) とのコラボレーションを企画することが討議された。

また、AUCの第2回ミーティングは、2013年の5月ごろにロンドンで開催することが提案され、企画セッションやフィールドツアーの開催などの詳細も含め、今後理事会で協議していくことが決まった。

CCSについては、多面的な研究をサポートすべきとの意見から、Critical review (批判的な文献レビュー) や Debate session (学問上の重要なテーマについて、複数の研究者が誌上で議論を行うセッション) などの新コーナーの創設が提案された。また、ロンドン大学との連携の可能性についても議論がなされた。

■堀口 朋亨(都市研究プラザ特任講師)



ワークショップの参加者

Prof. Andy Pratt (King's College, University of London), who is also a board member of the AUC (Association for Urban Creativity), visited Osaka and held a workshop on the AUC on December 14, 2012. At the same time as he expounded on his own research which is currently under way, Prof. Pratt presented a new strategic plan for the 2013 AUC Conference and for the academic journal *City, Culture and Society* (CCS).